

大草谷津田いきものの里 自然観察会

小さな春を探そう

山口由富子（市原市）

日 時：2012年3月18日（日）10：30～12：15 天候：曇り

参加者：8名（大人6名 子ども2名）

担当指導員：太田慶子・山口由富子

「春は、どんなところから感じますか？」という太田さんの呼びかけに、「芽吹きから」という声が上がり、そこで太田さんは自宅で作ってきたフキ味噌を、みなさんに試食してもらい、春を味覚で確認するところから、観察会はスタートした。

さらに、春は日差しが違ってくるということで、太田さんたちが編纂した「わくわくいづみ自然ウォッキング」を提示し、同じ面積に対する時間当たりの光エネルギーを理解してもらった。

しかし、ここ数日続いている寒さとこの日の曇天から、春の兆しはまだまだ遠いようで、ウラギンシジミは越冬スタイルで葉裏にしがみついていたし、イノデの芽だしも弱々しく、例年なら見られたというヒガンマムシグサは、まだ見ることができなかった。

田んぼでも、例年なら立ち並ぶアカガエルの卵塊マークである色つきの旗が、湧水わきでは、たったの2本。それでも、その根元には、小さなオタマジャクシが、じっと春を待つという姿勢で、たむろしていた。

参加者の声で、文句なく春を感じたのは、正調ウグイスの鳴き声とシュンランとタチツボスミレとツクシ。セイヨウタンポポが地べたに張り付くように咲いていたのは、もう、見慣れてしまったのか、促されて「あア」という感じだった。

慣れと言えば、今回の参加者は、2度目、3度目というふた組の親子と、いつもの常連。ここに「慣れ」という惰性が影響したのか、観察会の始まりと終わりに、メリハリがなかった。特に終わりは、だらけてしまって、大なる反省点と自覚している。

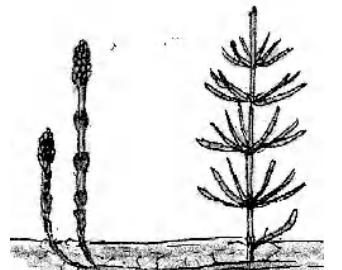
終了時間が変わることによって発生するトラブルは、危険予知訓練として指摘されている。それを避けることは、指導者の大事な務めであり、ひいてはわが身を守ることにもつながる。

トラブルといえば、今月の日本自然保護協会の会報誌では、「観察会では食べない・口にしない」ことに留意すべき、とあった。

本来、自然は五感で味わうものと推奨している。もちろん、原発からくる危惧であり指導者の保身のための提言だが、食いしん坊の私としては、何とも淋しく、残念でならない。特にクレソンの魅惑的な味わいは、生態系への話の導入には、もってこいの素材なのに・・・。

しかし、せめて、言葉でだけでも、食べられる植物は、紹介しておきたいと思う。有事の時に、ひょっとして、役立つかもしれないからだ。しかし、種の保存という観点も重要。ひとこと言えば、さらにふたこと、みことが必要となり、いろいろ考えると、じつに面倒くさい。私個人の希望としては、のんびり、自然の中に身をゆだねること。そのための場と水と空気があれば、それでいい。だが、それが問題になっている現在、ごくフツーだったことが、ぜいたくな望みとなっているようだ。

いったい、どうしたら、いいのだろう！？



ツクシとスギナは地下でつながる